

2010年も日本経済は波乱含み ベンチャーと世界技術で再成長へ

講師 梶信彦

1.5次～3.5次産業
1次産業は農業・林業・水産業など、2次産業は鉱業・
建設業・製造業など、3次産業は情報通信・金融・サー
ビス業などを指す。+0.5は、それらの産業に創意工夫
により何らかの付加価値を加えたもの。

日本経済は今年も波乱含みで、とて
も安定成長への軌道に乗ることは難し
いだろう。デフレ、円高、消費不況が続
き、アメリカ、EUの傷跡が深く、中東
のドバイ・ショックもなお影響が広がり
そうだからだ。その中でも特に地方経
済と地方のコミュニティの衰弱は一層
強まるかもしれない。しかし日本企業
には21世紀型の競争力をつけた1.5次
3.5次産業ともいべきアジアの中流層
を取り込む「世界商品」が多い。また、
歴史に育まれた「場所の力」を活かして
底力を見せる中小企業や地域の活性化
も目立つ。日本にはまだまだ再成長の
エンジンは十分にあると信じていたい。

「場所の力」を信じたまちおこし

人口5000人余りの島根県大田市大
森町は、山間部にひっそりとたたずむ
過疎の町である。しかし、この町は、
3～4年前から2つのことで日本、い
や世界に知られはじめた。

ひとつは、かつてこの地域で栄えた
「石見銀山」の跡が2007年に世界遺
産に登録されたことである。石見銀山
は16～20世紀に大量の銀を産出し、一
時は世界の銀の流通量の3分の1を占
めたといわれる歴史的な場所。世界遺
産登録のためには、それらを裏付ける
資料(古地図、絵巻、海外の書物等)を
収集し、なおかつユネスコ世界遺産委
員会の厳しい審査にパスする必要があ
る。第1次審査では登録延期を言い渡
されたが、当時から環境を配慮して自
然(山・森林)を壊さずに掘られたとい
う事実と、最盛期の16世紀に流通した
世界との交流の物証となる石見銀山の
シンボル「古丁銀」が地元に戻ったこ
とで、第2次審査で奇跡の「大逆転登
録」が実現したのである。

石見銀山はこうして日本で14番目の
世界遺産、アジアで初めての産業遺産
となり、日本中が過去の大銀山の存在
と世界遺産の報を聞いて驚いたものだ。
その後、間歩(坑道)や資料館、歴史を知

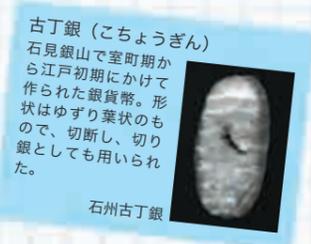


大森町
街道沿いの
まちなみ



龍源寺間歩入口

石見銀山の特徴は、自然を破壊せず、環境に配慮
した「自然環境と共存した産業遺産」であること。
世界遺産登録された遺跡の範囲は「銀鉱山跡と鉱
山町」「街道(石見銀山街道)」「港と港町」の3
つからなる。



古丁銀(こちようぎん)
石見銀山で室町期か
江戸初期にかけて
作られた銀貨幣。形
状はゆずり葉状のも
ので、切斷し、切り
銀としても用いら
れた。

石州古丁銀



梶 信彦
しま のぶひこ
ジャーナリスト

1942年生まれ。慶応大学経済学部卒業後、毎日新聞社入社。東京本社経済
部で金融、官庁、経団連などを担当。1981年、ワシントン特派員になり、
サミットや国際会議を取材。1983年には米ミシガン州フリント市の名誉市
民となる。1987年に毎日新聞社を退社しフリーに。TV・ラジオのコメント
ーターとして活躍。現在もTBS『朝ズバ!』、BS-TBS『榎原・梶のグロ
ーバルナビ』、TBSラジオ『梶信彦のエネルギートーク』などにレギュ
ラー出演中。また、白 大学経営学部教授、NPO法人『日本ウズベキスタ
ン協会』会長も務める。著書に『日本の「世界商品」力』(集英社新書)ほか
多数。

ろうと訪れる人が増え、近くの津和野
や山口県の萩などを廻るツアーの一環と
して年間100万人を超える観光客が
訪れるようになった。石見銀山の歴史を
掘りおこし、「場所の力」を信じた地域
の人々の努力が、観光に繋がったのだ。

地域に根付き、世界に羽ばたく ベンチャー企業

もうひとつ大森町を世界的に有名に
したのは、『中村ブレイス』の存在だ。大
森町に本社をおく同社は、事故や手術
などで身体の一部を損傷したり、切断
されたりした部分に対し、シリコーン
ゴムを活用して生体人工修復を行なう
「義肢装具」を製作する会社で、その精
巧さとアートの視点を取り入れた技術
は「メディカルアート」といわれ、国際
的にも1・2位を争う、まさにオンリー
ワン企業なのである。

で商業・経済学を学び、その後技術を修
得するため義肢先進国アメリカに渡る。
そこで2年半学んだなかで最も重要な
ことは、医師が患者に「この義肢を使
いなさい。」と一方的に渡すのではなく、
患者に何度も意見を聞いて、個人に合
った最良の義肢を提供しようとする姿
勢だったという。

帰国した中村さんは故郷の大森町で
『中村ブレイス』を立ち上げる。はじめ
は実家の10坪の納屋を改装した、アメ
リカでいう「ガレージ(車置き場)」か
らスタートしたベンチャー企業だった。
地道に業績を伸ばしていた数年後に転
機が訪れる。ある展示会の記念品とし
て持ち帰ったシリコーン製の灰皿を手
に取ったとき、弾力のあるこのシリコ
ーンを使って医療用の足底板(靴の中
敷)を作ったら…というアイデアが閃
き、アーチ型や内外側が厚いものなど
数種の中敷を手がけた。これまでは革
製やコルク製だったが、シリコーンで
自由な型を作ることによって扁平足や外反母

趾などに有効とわかり、世界的に大ブ
レーク。その後このシリコーンを研究
し、いまや義手、義足、手、乳房、指
など、何十種類もの義肢を、使う人の
皮ふの色、爪の形、透き通る血管まで
他の身体の部分とほとんど変わらぬよ
うに作っている。

「一人から本当に喜ばれる義肢をひと
つひとつ作るのが会社の仕事。社員は
全国から来た30歳前後の若者が中心で
彼らが生き生きと誇りをもって働ける
環境を作ることが私達の役割」と、働
く若者の姿を見て語る中村さんも、実
に穏やかで誠実そのものの風貌だ。ま
た、歴史ある地域を世界に発信するこ
とも自分の役割という中村さんは、石
見銀山の世界遺産実現プロジェクトの
中心人物でもあった。



シリコーンゴム製インソール
アーチサポート



シリコーンゴム製
人工補正具 スキルナー

『中村ブレイス』は、事故や
病気で失った身体機能を単に
物理的に補うだけに留まらず、
その質感と美しさで、使用者
の自尊心まで回復させる製
品を世に送り出している。



中村ブレイス株式会社
社長 中村俊郎氏

私はこの10年間、地域に根付き、オ
ンリーワンの技術で世界に羽ばたく中
小、中堅企業やベンチャーを数えきれ
ないぐらい見てきた。日本の大企業は
世界的企業として奮闘しているが、2
010年の日本は、こうしたベンチャ
ーの底力を活かせるような企業と地域
の相次ぐ出現が日本を元気づける活力
源になると確信する。